



選考委員特別賞
最相葉月賞

祖父が教えてくれたこと

仙台市立錦ヶ丘小学校 五年

稲村 柚里香

私の祖父が死の宣告を受けたのは、楽天イーグルスがパリーグ優勝した日だった。

祖父にとりついていたのは、悪性度の高い食道がん。粘表皮がんとせんがんが合わさった珍しいがんで、手術はできないのだそうだ。

ある日、学校の休校日が祖父の診察日と重なったので、私も東北大学病院について行った。

祖父の主治医は、若くて、笑顔がやさしい親しみやすい先生だった。私は、もっと深刻そうな雰囲気予想していた。けれども、先生はにこにこしていたし、祖父も

おだやかだった。先生の毎日がしみこんだような、白くないよれよれの白衣だけが、リアルだった。

先生の向かいに祖父母が座り、その後ろに母がいた。席がいっぱいなので、私は診察室のベッドのはしにこしかけた。足が床に届かないから、何となく足をぶらぶらさせていた。

先生は初め、私のことを気にしているようだった。そこで、祖母が言った。

「今日は家族全員で来たので、全て聞かせて下さい。」

先生は、パソコンの画面を拡大して、私たちに見せた。

「赤くなっているのが、転移が疑われる所です。ステージ4と考えます。」

先生がマウスで画面を動かすと、別の写真が現れる。小学三年生の私にだって分かった。おかしい所がたくさんある。どきりとする赤。

「残念ながら、根治は困難と思われます。」

みんなおしだまってしまった。私は、祖父のやせた背

中を見た。

おじいさん、悲しそう。

祖母が、がまんしきれなくなったように、先生にたずねた。

「原因は何なのですか。」

先生は、

「これから先、がんにならない生活ならいくらでもお話しできるのですが……」

と言ったきり、困ったように笑った。

「誰でも、一日数千個位、がん細胞はできるんです。でも、人の免疫がそれをやっつけてくれる。だから、若いうちは大丈夫なんです。老化によって免疫のはたらきが弱くなると、がんが大きくなってしまっんです。」
ひいおばあさんはもう九十才だけど、がんにはなっていない。

何ががんになる、ならないを、分けるのだらう。

「がんがこの位の大きさになるまで、十年はかかっています。こうなると、今、目に見えるがんをいくら取り除

いても、次から次へと転移が出てきてしまうかもしれません。でも、幸い、食道がんには、放射線がよく効きます。手術と同じ位の効果があるので、抗がん剤と合わせて、やってみる価値はあります。延命が目的ですが、試してみませんか。」

「はい、先生。お願いします。」

それまでだまっていた祖父が答えた。がんのせいでしゃがれてしまった声。やせた背中。祖父を見ていたら、足の裏がむずむずするような、たまらない感じがこみ上げてきた。

せつないような、いてもたってもいられない感じ。泣きたいのをがまんするような感覚。

しゅよう内科の先生は、やさしく励ますように言った。

「稲村さん、一緒にがんばりましょう。」

あの日から、何かが変わってしまった。

今から思えば、先生は、がんの原因は老化だと言ったけれど、なぐさめているような口ぶりだった。これから

始まる悪いことを知っていたのに、優しさでかくしていたのだ。

祖父のがん治りようが始まった。

週五回病院に通って、放射線を当てる。放射線を六週間当てることをワンクールと言い、その前半と後半に五日間ずつ入院して、抗がん剤を二十四時間連続して点滴する。

私自身、ぜんそくで今までに五回入院したことがある。だから、色々な検査も経験しているし、車椅子や酸素 TENT だって使ったことがある。

でも、がんとなると話は別だ。

私は、がんのことを何も知らない。

私は、病院に置いてあるパンフレットを読んだ。「食道がん」と「放射線治療」。そこに、お酒を多く飲む人が食道がんになりやすいことが書いてあった。やはり、がんになる原因は、老化以外にもあったのだ。しん察のとき祖母は、がんの原因を医師の口から聞きたかったのかもしれない。でも、先生は、祖父を苦しめないよう

に、過去を責めなかった。祖父の主治医が、思いやりのある先生で良かったと思う。

実を言うと、私は、ものすごいこわがりだ。動物のテレビ番組で、ライオンが足を引きずっているインパラしのび寄るだけで、顔をおおってしまう。だけど、がんを意識するようになってからは、新聞のテレビらんで、「がん」という文字を探すようになった。手術シーンも指のすき間からこっそり見た。がんに効きそうな食べ物、家族全員で食べた。ブロッコリーとか、しいたけとか、玉ねぎとか、バナナとか。まるで、私たちが全員、ナチュラルキラー細胞に変身して、祖父のがん細胞をやっつけるつもりで、一生けん命に。

そして、奇跡が起こった。

祖母母と両親と私の五人で、グアムに行けたのだ。

グアムは、祖母母が新婚旅行で訪れた場所だった。でも、それ以来、墓参り以外どこにも旅行したことがないというのが、祖母の口ぐせだった。だから、母が気をまわして準備したのだ。

私にとっては、初めてのグアム。

むし暑いけれど、街にはクリスマススのイルミネーションが光り、ホテルのロビーにはお菓子の家があった。青くすきとおった海。光がゆらめくプール。

祖父母と母はチェアに座って、プールにいる私に手をふった。私も祖父母に泳ぎを見せられてうれしかった。水しぶきがまぶしい。

いつまでも、今が続けばいいのに。

小さな船に乗って、夕日を見に行くクルーズにも行った。

日焼けした笑顔のやさしいおじさんが、細長く葉をさいて、くると丸めていく。おじさんが母にそれを差し出すときには、緑色のバラの形になっている。それから、また何かを作って、私にくれた。つるのはじを持って動かすと、緑の小鳥が飛んでいるように見える。プルメリアで髪がざりを作って、髪にさしてくれる。とたんに甘い香りに包まれた。

けれど、夕日は見えなかった。

祖母が、祖父に小言を言った。

「あなたが、運の悪い人だから。」

でも、みんな笑っていた。サンセットが見れなくても、イルカに出会えなくても、初めての家族全員の海外旅行なのだった。

「今度は、ハワイに行きたいなあ。」

と祖父が言った。母が「うん、うん。」とうなづいた。本当にハワイにも行けそうだった。

しかし、変化は突然来た。ぜいぜい苦しうに息をしていると思ったら、肺炎だった。心臓のまわりに水もたまった。甲状せんが悪くなって、身動きがおそくなった。夜中に、父が祖父をきゅう急外来に連れていくことも多くなった。そうになると、体の弱い母も体調をくずしてしまう。母の両うでから、点てきでできた青あざが消えない。それでも、私の学校までのお迎えを休むことはできない。

「五年生になったら、近所に転校してくれるとありがたいんだけど。」

ある時、母がこう言ってきた。

えっ。転校なんて一度も考えたことがない。

「なんで、初めから近所の学校にしとかなかったのよ。」

「こんなことになるなんて、思いもしなかったから。」

「もし、一人ぼっちになったら、どうするの。」

「だいじょうぶよ。友だちなんて、すぐできるわよ。」

お母さんは、なんにも分かってない。

五年からの転校なんて。

それに、おじいさんは、毎朝、私をバス停に送ってくれるでしょ。

おじいさんと今の学校の思い出は、木のパズルみたいにびったりくっついてるんだよ。

スクールバスのバス停まで車で二、三分。入学以来、私を車で送るのが、祖父の日課だった。

「じゃあね。」

と私は車から降りて、軽く手をふる。

「いってらっしゃい。」

祖父はそのまま、車をバス停のとなりのコンビニエ

ンストアの駐車場に入れて、バスが通り過ぎるのを待っている。

バスがコンビニの前を通るとき、私は祖父の方をちらっと見る。祖父は私に向かって手をあげる。でも、友だちが話しかけてくるから、私は手をふり返せない。胸がチクンと痛む。

お母さんは、そんなこと、知らないでしょ。

夜だって、祖父はたまに迎えに来てくれた。

祖父の白髪頭は目立った。うでを組んで、肩が痛いから首をぐるぐる回していた祖父。

私に会うとすぐ、ランドセルを持ってくれた。身軽になった私は、駐車場まで走った。

「速いなあ。」

と息を切らして、祖父は追いかけてきた。

暗い帰り道。車に流れるのは石原裕次郎。

「あーかしやのー、はーなのしたーでー。」

おじいさんと私、一緒に歌ったんだよ。

ずっと続くと思っていたのに。

本当は転校だけがこわいんじゃない。

こんな風に、なにもかも変わること、大切なものを失うことが、こわいんだ。

ある時、しゅよう内科の先生に言われた。

「肺に転移しました。余命は一年位でしょう。」

その話をしながら、母はぼろぼろ泣いた。

「みんなでがんばったのに……」

本当にそうだ。がんばってひどすぎる。

「ゆりちゃん、おじいさんのこと、忘れないでね。」

忘れるはずがないと思う。

「お母さんも、おじいさんと暮らしていたけれど、今じゃ、あんまり思い出せないのよ。」

母は、スーパ－の駐車場でいつも車を探し出せないし、学校にお迎えに来たときも、私のことを見つけれない。後ろから指でつくくとどび上がって、

「みんな同じ制服だから。」

と言いつくす母とは、私はきつとちがう。

「なんでも覚えていて、いやねえ。」

と母は言うけれど、幼稚園の頃から、カメラの液しように見えているように、世界が私の心にうつりこむようになった。

初めて自転車に乗れた日、祖父は私のそばにいた。父はビデオをとっていたから、私の自転車がおれないように見守っていたのは、祖父だった。

雪が降ると、おじいさんは雪だるまを作ってくれた。

目に木炭を入れたせいで、顔つきがしぶかった。

おじいさんの顔に似てたっけ。

そして、末期がんとわかったあの日。

あの日から急にピントが合って、祖父のことが、家族のことが、あざやかに見えるようになった。

今、私は、おじいさんと同じ時を生きている。みんな、一生けん命、生きている。

祖父の余命を聞いてはじめて、このことをよりはつきりと理解できたのかもしれない。

命のことを考えるのは、初めてではない。

私は東日本大震災を経験している。あのとき、私の家

では、電気が三日止まり、水とガスが十二日間使えなかった。私たちは、毎日を暮らすだけで精一杯だった。寒かったので、着こむしかなかったし、食品が少なくなるのもこわかった。日が沈むと暗くなるということさえ考えたことがなかったので、夕方はあわてた。

あのとき、電気があり、水があり、食べ物がある幸せを知った。当たり前の幸せを大事にしようと心にちかたはずなのに、今は、無意識に水を出しっぱなしにした、思わず嫌いな野菜を残してしまったりしている。

私たちが、毎日生きることでもいいいっぱいになっていたあのとき、私たちのすぐとなりでは、泣いている人がいた。行方不明の家族を探している人がいた。家を失った人がいた。そのことに気がついたのは、電気が通ってテレビがついた三日後のことだった。私はたまたまなかった。延期になった卒園式や入学式のことばかり心配していたことが、はずかしかった。足の裏がむずむずするような、いたたまれない、あの気持ち。

仙台に生まれて、震災を経験した私は、この気持ちを

背負って生きていく。私が遊んだ海で、多くの人が亡くなったこと。子どもたち、子どもを思う親たち、お年より、多くの命があの震災で失われたこと、そのことを胸にきざんで、生きていく。

私はぜんそくで苦労したので、将来はぜんそくの研究者になりたいと思っていた。震災後は、積極的に治療する医師になりたいと、思いが変わった。苦しんでいる人に手をさしのべたい、何か自分でもできることはあるはずだと思う。

私は、進学塾に通い始めた。

だが、難しすぎた。何が何だか、さっぱりわからない。でも、余裕たっぷりの子もいる。

医者になるような子は、きっとこんな子だ。

私には、無理かもしれない。

いやな感じが、どんより広がってきた。

半年後、私は五年生になった。

近所の小学校に転校した日。

何て言おう。何を話そう。

どきどきして、頭の中はまっ白。

「ねえ、ゆりかって呼んでもいい？」

「えっ、いいけど。」

いきなり呼び捨てときた。

「ゆりかさあ、男子なんか『くん』なんてつけなくていいから。」

「それって、ゆりかの勝手だし。」

と、男子が女子と言いつ合っている。

「ゆりかって、いつも笑ってるよね。」

と女子。

「ゆりかってさ、表シロだけど、裏クロじゃね？」

と男子。

「そっちなんか、どっちもクロでしょ。」

「それ、おまえだろ。」

おかしくてたまらない。

こんな風にクラスメイトにかこまれるとは思ってもみなかった。

転校してよかったことは他にもある。

もうスクールバスのバス停まで祖父に送ってもらったとはないけれど、別の日課ができた。窓辺で見送ってくれるのだ。私も、友だちを気にせず、祖父に手をふることができる。下校が早い日には、塾に行く前に、祖父のとなりで学校の宿題をすることもできる。祖父はにこにこしながら、私をながめている。

転校するのはこわかったけれど、実際にとびこんでみたら、何もこわがることはなかったと思う。こんな私でも、勉強を続けていけば、なるようになるかもしれない。

東北歴史博物館で、「医は仁術」展が開かれたので見に行った。

江戸時代の医者的心得は、「茲仁。」「思いやりの心。」という意味だという。「医は自然のどれいなり。」という言葉もあった。これは「患者がもともと持つ元気になる力を助けるのが医師の役目」という意味だそうだ。

江戸では、「医をすべての人に。」という考えから、貧しい人を無料で受け入れる小石川養生所をつくり、治

りように当たった。また、ききんの時などのために、薬草の使い方を説明した本を、村々に配り歩くこともあった。

「医者を目指す者に最も大切なのは、思いやりの心である。」

この文章に出会って、私は勇気づけられた。

私は、特に頭はよくないけれど、周囲の観察は得意だ。さらに、患者とその家族の立場の両方を体験している。

患者は入院すると、「病気はよくなったのか。」「退院はいつか。」と、より詳しいことが知りたいものだ。患者の家族にとっては、「よりよい治りようを受けられているか。」が一番気になる。つまり、患者もその家族も、ほしいのは、「安心」なのだ。

もし、私に強みがあるとすれば、患者と家族の両方の気持ちに分かることだと思う。これから真面目に勉強して、思いやりの心を育てていけば、私だって目標に到達できるんじゃないだろうか。

祖父のがんは、消えなかった。それどころか、大きくなりすぎた。治療も中止となった。

でも、あと一年と言われた日がもうすぐ来るけれど、今日も窓辺で手をふってくれている。一日一日が、大切でたまらない。

みんな、一生けん命、生きている。

祖父は私に、命と向き合うことを教えてくれた。震災は私に、当たり前の日常がいつこわれるか分からないことを、気付かせてくれた。だからこそ、私たちは、毎日生きていることに感謝する気持ちを忘れてはいけないんだと思う。

祖父にかわいがられた私は、なんて幸せだったんだろう。

祖父に出会って、よかった。

この気持ちを、一生忘れない。

「すべての人に、思いやりの心を。」
命について考え続けて、私はこの言葉にたどり着いた。

たくさんの人のつながりで、私は生きている。たくさんの人に、生かされている。

私が今まで受け取ってきたものを、思いやりという形で、いつか周りにとどけよう。

私は、今、心からそう思う。